

デイヴィドソンのコミュニケーション能力論からの グローバル・エラー再考

柳 瀬 陽 介
(広 島 大 学)

1. 目 的

本論文は、ある第二言語習得者の述懐を問題意識の設定に用い、デイヴィドソンによるコミュニケーション能力論を援用することで、その述懐に現れる言語観を理論的に説明し、いわゆるグローバル・エラーについて再考することを目的とする。

2. 問題設定

ここではまずある第二言語習得者の述懐¹⁾をとりあげ、そこにみられた言語観を説明すべき問題として設定する。米国人Sは在日13年目で現在はタクシーの運転を生業としている。彼は日本に来てはじめて日本語を学習し始める。在日5年目で生活に不自由しない程度の日本語を身につけた後、彼はタクシーの運転手となるが、それでも乗客との会話が彼の日本語のレベル以上になることが多々あったというし、また現在でもあるという。それでも乗客の「日本人に言葉の誤りを許してもらったり、無理に私の日本語を理解してもらったり」、「場合によっては子供に教えるくらい丁寧に教えて」もらったりすることによって「最終的にお互いに通じ合って、話が楽しくできる」という。

そんなSはやがて日本人が自らの英語使用に関して強固な先入観を持っていることに気づき始める。彼が紹介する典型的なエピソードは、ある日本人会社員(仮に田中と呼ぶ)とその会社へのゲストとして来日した外国人観光客との間のものである。田中は英語ができないということなので、Sはタクシーの中やレストランの中などで田中と外国人観光客の間の通訳となっていた。しかしSが席を中座した後、テーブルに帰ろうとすると、驚くことに二人は熱心に英語で話していた。Sはすぐにテーブルに戻らずに二人を観察した。たしかに田中の英語は「カタコト」であったが、楽しそうに英語を使用し、外国人観光客はその英語を理解していたように見受けられた。しかしSがテーブルに戻ると田中はいきなり日本語に戻り、Sに通訳を頼んだ。Sが「田中さん、英語できるじゃないですか。英語で話そう」と言うと、田中は「とんでもない。ハロー

くらいしか言えない」と応える。「でも今話していたじゃない。上手だった」とSが言うと、田中は「やーそれはSさんがいなかったから。Sさんの前で英語話すなんて恥ずかしいよ」と述べたという。Sはこのエピソードの前から日本人は英語を正しく話さなければ恥と思っている事に気づいていたが、この田中の言葉でその事を強く実感したという。

Sは日本以外の七カ国を旅、ホームステイ、留学などで訪れた経験と、タクシーを通じて二十数ヶ国の人と英語で接した経験から、勉強のわりに英語力が一般的に一番低いのが日本人だと思うようにいたる。彼はこの日本人の英語力の低さは「英語を正しく話さなければ愚かだと思われる」という先入観によると考える。彼は自らの第二言語習得体験なども踏まえつつ次のように総括する。

言葉の「正しい」というのは文法や語彙ではない。言葉は単なるコミュニケーションの手段ですから、相手に言いたいことが伝わったら、それで「正しい」と思います。身振り手振りにルールは一つ：相手が理解するまで当たり外れでがんばる。言葉も一緒。日本人はこのことを理解するまで英語を楽しむ事ができません。

学校であっても、会話スクールであっても、日本で英語を教える全ての人の、一番の責任は今までの日本人の先入観を破って英語をコミュニケーションの手段として教えることです。

この言語観を「素人の意見」として切り捨てるのは容易である²⁾。しかしこのような意見はSだけのものではないとするならば³⁾、第二言語教育論はこの言語観になんらかの応答をしなければならぬ。かといって情緒的に「間違いを怖れず英語を使おう」と既に使い古されてしまった常套句で応じて、それは英語教育の現状を変える力とはならないであろう。以下、この論文ではこの言語観を理論的に説明し、いわゆるグローバル・エラーについて新しい意味を与えるを試みる。

3. デイヴィドソンのコミュニケーション能力論

現代の英米分析哲学の代表格であるデイヴィドソン

(Donald Davidson 1917-) のコミュニケーション能力論は1986年の“A nice derangement of epitaphs”に凝縮されて表現されている。彼の論は従来の言語学・応用言語学的発想と大きく発想を異にする論である。従来のコミュニケーション論は、チョムスキーの言語論を批判的・発展的に継承したものであり、チョムスキーの主張する生得的な言語の知識 (knowledge of language) およびそれ以外の慣習的な言語知識 (language knowledge) をコミュニケーション参加者が共有していることを前提として論を進める。代表例としては Canale and Swain (1980) があげられるが、彼らはコミュニケーション能力 (communicative competence) を、文法能力 (grammatical competence) と社会言語学的能力 (sociolinguistic competence), およびそれらの不足を補うコミュニケーション・ストラテジー (communication strategies) の統合に求める。Bachman (1990), Bachman and Palmer (1996) になると、それらの言語知識に加えて、世界知識 (knowledge of the world) をも共有される知識として加えている。彼らの論においては、従来明示的に述べられていなかった知識の統合の役割が、方略的能力 (strategic competence) という概念で前面に出されているが、いずれにせよコミュニケーション能力が言語知識と世界知識の共有を前提としているという発想は従来の発想の延長上にあるものである。

デイヴィッドソンもこの発想を全面的に否定するわけではない。彼はいわゆる言語知識と世界知識を一括して事前理論 (prior theory) と呼ぶ⁴⁾。しかしこの事前理論の共有だけではコミュニケーションの成立が説明できないことを示したのがデイヴィッドソンの独自性である。彼は、慣習的知識の共有程度をもつばらの論点として、特定のコミュニケーションの成立をそれに続く自明のこととしていた従来の発想と異なり、特定のコミュニケーションの成立からコミュニケーション能力には何が必要とされているかを問い直すというように発想を逆転させたのである。

その際にデイヴィッドソンが取り上げたのがマラプロピズム (malapropism) である。マラプロピズムの代表例としては ‘the geography of contiguous countries’ のことを考えながら “the geometry of contagious countries” と言ってしまうたり、 ‘a nice arrangement of epithets’ を意味しながら “a nice derangement of epitaphs” と言ってしまうたりなどという、言葉の ‘humorous misapplication’ (Merriam-Webster’s Unabridged Dictionary) があげられるが、デイヴィッドソンはそのマラプロピズムを拡張させて論

を展開する。彼は、マラプロピズムはどこにでもある (ubiquitous) 現象だと考える。別に面白いとか驚くような間違いである必要もなく、決まり文句に基づいたものである必要もなく、意図的なものである必要もないとする。言葉遊びになっている必要もなく、わざと駄洒落になっている必要もない。例えば “Lead the way and we’ll precede.” (“Lead the way and we’ll proceed.” のつもりでの発話) といった現象を彼はマラプロピズムの一例としている。

こうしてマラプロピズムを拡張して考えてゆくと、それは事前の学習ではカバーされていない表現を私たちがしばしば理解するという現象を前面に出してることとなる。デイヴィッドソンによれば、それは、「実際の発話が不完全であったり文法的に問題のあったりするのに、完全な文を認識する能力」、「今までに聞いたことのない語を解釈する能力」、「言い誤りを正したり新しい個人造語に対応したりする能力」などであり、これらは私たちのコミュニケーションにおいてはしばしば必要な能力である。

さらに考えるならば、第二言語でのコミュニケーションにおいてはこれらの能力は日常的に要求されているといえる。対話者の一方あるいは両方が第二言語として当該言語を話している第二言語コミュニケーションにおいては、参加者はいわゆる非文法文にしばしば対処をしなければならぬ。相手がこちらの知らない相手の母国語を部分的に使用してコミュニケーションを図ろうとする場合もある。発話者が語彙を知らないため、極めて非慣習的で要領を得ない言い換えをする場合もある。相手が第一言語として当該言語を話しているのなら、相手の発話が早すぎて一部を聞き取れず、さりとて発話を遮って聞き返すこともできないままに発話を理解しなければならない場合もある。相手が自分の知らない語彙を使いつつも、その語彙について尋ねることができないままに発話を理解しなければならない場合もある。第二言語使用を扱うコミュニケーション能力論は、特にこれらの現象を説明できるものでなくてはならない。

しかしこれらは、言語についてであれ、世界についてであれ、慣習的に共有された知識を基盤にした従来のコミュニケーション能力論では説明がしがたい。これらはまさに知識が共有されていないが、それにもかかわらずコミュニケーションが成立するという例だからである⁵⁾。応用言語学のコミュニケーション能力論もこの点を捉え損ねている。Canale and Swain (1980) 以降のコミュニケーション・ストラテジーの議論は主に発話者の立場から考察されており、解釈者がそれらのコミュニケーション・ストラテジーによる非慣習的

あるいは非文法的な発話をどう解釈しているかという点を看過している。Bachman (1990), Bachman and Palmer (1996) の方略的能力も、目標設定-アセスメント-計画といった目的-手段構造的な発話を考察の主な対象とし、デイヴィドソンのマラプロピズムの問題提起によって示された逸脱的な、しかしそれでいて日常的なコミュニケーション現象を捉え損ねている。

これらの現象は「言語能力に関する標準的記述に対する脅威となる」が、言語知識論ならともかくも、コミュニケーション (特に第二言語コミュニケーション) を私たちが考察の対象とするのなら、これらの現象を正面から説明しなければならない。

それではデイヴィドソンは、どのように特定のコミュニケーションが成立することを説明するのだろうか。彼は上に述べたように従来の発想とは逆転した発想をとる。すなわち即事理論 (passing theory) の重視である。即事理論とは、特定の発話の解釈方法である。無論、理想的なコミュニケーションにおいては、共有されているはずの事前理論に従った方法で解釈をしてゆけば解釈は成功するはずである。しかし実際のコミュニケーション、特に第二言語コミュニケーションにおいては、事前理論は必ずしも共有されていないのであった。また仮に事前理論が共有されていたにせよ、間違いはしばしば生じ、その間違いとは定義上、事前理論とは異なるものであった。そのような実際の発話を解釈する方法とは、しばしば事前理論によって導かれる解釈の方法ではなく、まさにその状況におけるその発話者による特定の発話に対応するための方法である。デイヴィドソンはその特定の解釈の方法を即時理論と名づける。別の言い方をすれば、この事前理論と即事理論の対比は、前者が修正を受け発展しながらも比較的安定して長期的に保持されるのに対して、後者が特定の時空間での特定の発話だけに対応するものである、と表現される。この意味で Dummett (1986: 460) は事前理論を長期理論 (long-range theory)、即事理論を短期理論 (short-range theory) と言い替えている。

無論コミュニケーションは解釈だけから成り立っているわけではない。上の即事理論の定義は聞き手からの立場からのものである。話し手からの立場からの即事理論の定義を、デイヴィドソンは、話し手が自らの特定の発話において聞き手が採択するであろうと意図している解釈の方法だとしている。

こうしてみるとコミュニケーション能力の規定が、従来のような慣習的知識の共有とは異なってくる。デイヴィドソンによるなら、コミュニケーション能力とは、話し手と聞き手がお互いの即事理論をできる限り

収束 (converge) させて相互理解をすることとなる。すなわちコミュニケーション能力とは発話によって理解してもらうことであり、また発話を理解することである。この定義はデイヴィドソン自身認めるようにほとんど循環的ともいえる定義である。しかし彼によるならばこの定義はほとんど循環的であるがゆえに、公理のように正しいものであり、これを認めることによって事前理論だけでなく即事理論が要請される。さらに事前理論は即事理論の形成に役立つ限りにおいて重要であるとされ、コミュニケーションの成立とは即事理論の収束 (実質上の共有) であると定義されて、即事理論の重要性が強調されるのである。

ここで「即事理論の収束 (実質上の共有)」という表現が用いられたが、デイヴィドソンはここにおいても注意深く論考している。事前理論の考え方からの類比なら「共有」(share) ということばをこだわりなく使うのかもしれないが、デイヴィドソンが即事理論に関して共有という言葉を使うときは、「コミュニケーションが成立する程度に応じて」共有されるというように限定を加えている。「収束」という言葉は、コミュニケーションの成立が程度問題であることを示すために用いられていると考えられる。

まとめとしては、次の箇所の引用 (Davidson 1986: 475) がデイヴィドソンのコミュニケーション能力論をもっとも手短かに示しているといえよう。

[W]e might try to say in what a person's ability to interpret or speak to another person consists: it is the ability that permits him to construct a correct, that is, convergent, passing theory for speech transactions with that person. Again, the concept allows of degrees of application. (私たちは人が解釈したり他人に話したりする能力が何によって構成されているかを次のように表現することができる。すなわち、その能力とは、相手とのことばのやりとりのための正しい (つまりは収束する) 即事理論を構築することを可能にする能力である。)

4. デイヴィドソン理論による説明とその含意

それでは以上のデイヴィドソンのコミュニケーション能力論から、冒頭で述べたSの述懐に現れる言語観はどう説明できるだろうか。一見してデイヴィドソンのコミュニケーション能力論がSの言語観と符合していることに私たちは気づく。とくに注目すべき点は、Sの言葉に従うならば、言語の「正しさ」について、「コミュニケーションのルール」についてである。

まず、言語の「正しさ」についてであるが、Sは言

語の「正しさ」を言語慣習に求めていなかった。Sは言語をあくまでもコミュニケーションの手段としてとらえた上で、言語は相手に理解される限りにおいて「正しい」と主張していた。無論これは、言語慣習の社会的共有を言語習得の定義的特徴としてとらえていた従来の言語学的発想からすれば異端の考えである。しかしいったんコミュニケーションを考察の基盤におくならば、デイヴィドソンが言うように、話者と聴者の間で収束した即事理論こそが「正しい」ものであり、言語慣習への一致は二次的な問題でしかない。相互理解が成立する限りにおいて（つまりは即事理論が十分に収束した限りにおいて）そこで使われた言語は「正しい」のである。ここにおいてSの述懐とデイヴィドソンのコミュニケーション能力論は一致を示している。

むしろ即事理論の収束が速やかに行われるためには、言語慣習（デイヴィドソンの言い方なら事前理論）の共有の度合いが進むことが好ましいであろう。しかし第二言語コミュニケーションのみならず、第一言語コミュニケーションにおいても言語慣習（ましてや事前理論）の完全な一致は現実にはありえない理想状態にすぎず、それは果てしない目標となってしまう。

そのような目標は従来、大局的には望ましいものと考えられてきたが、「英語帝国主義論」（津田（1990））の批判や「My English」論（田中・深谷（1998））の登場は、そのような目標が、果たして大局的にも適切なものであるかどうかについて問題提起をしている。これらの論調が指摘するのは、（それが何を意味するものであれ）「英語共同体」の言語慣習への一致という、第二言語学習者にはほぼ実現不可能な目標が学習者を心理的に追い詰めてしまうことである。それならば目標は実現可能なものにおくべきとなろう。その実現可能な目標が対話者間の相互理解であり、その目標の達成を告げる一つの指標が言語の「正しさ」を言語慣習への一致ではなく、コミュニケーションの成立に求めることである。Sの主張はデイヴィドソンのコミュニケーション能力論によって正当化されるだけでなく、第二言語教育が採択すべき目標設定に関して重要な問いかけをしているといえる。

Sの述懐とデイヴィドソンのコミュニケーション能力論の一致で注目すべきもう一つの点は、「コミュニケーションのルール」についてである。Sは身振り手振りを含めてのコミュニケーションのルールは一つであり、それは相手が理解するまで試行錯誤を続けることだという。これはデイヴィドソン流にいうなら、即事理論をお互いに収束させようとする試みに相当する。コミュニケーションが成立しないときになされるべきことは、当該言語をより知る者がより知らない者の

'broken English'を直すことではない。また後者が自らの「無知」を恥じることでもない。必要なのは、互いの事前理論の状況を受け入れた上で、その場で有効な方法、すなわち即事理論を作り上げ、それを相手の即事理論と収束させるという柔軟な対応なのである。確かに長期的には第二言語学習者は第二言語を学ぶべき存在であろうが、コミュニケーションの現場という短期的な視点からすれば自立的な一人の人格的存在としてとらえられるべきである⁶⁾。Sやデイヴィドソンの考えに従うなら、コミュニケーションのルールとは、長期的にしか変わりえないこと（事前理論）の変化を望まずに、短期的に変わりうること（即時理論）のみを変化させ、相互の理解の仕方を互いに収束させることである。

Sは、「日本で英語を教える全ての人の、一番の責任は今までの日本人の先入観を破って英語をコミュニケーションの手段として教えること」であると主張する。これをデイヴィドソンのコミュニケーション能力論に従って言い直せば、コミュニケーションの場においては事前理論の一致ではなく即事理論の収束を言語の「正しさ」とすること、そしてその「正しさ」のみを求めてその場で可能な試行錯誤を重ねること、となる。

ここではSの主張に理論的裏づけを与えた。しかしこのことはSの主張が無批判に英語教育の方針となるべきことは含意しない。Sの主張を強くするなら事前理論の軽視につながりかねない。またSとてある程度の日本語を学習してからコミュニケーションの試行錯誤を本格的に始めたことにも注意しておくべきだろう。しかしデイヴィドソンのコミュニケーション能力論による理論的理解を経た私たちはSの主張に次のようなことを読み取ることができる。すなわち、第二言語教育に事前理論と即事理論という二つの側面があること、その二つは言語共同体への一致か対話者間の理解の収束かという点でも分けられるし、長期的か短期的かという点でも分けられること、である。事前理論と即事理論の教育実践上の軽重はともかく、理論上の区分は今後の第二言語教育の知的目録の一つとして明記されなければならない。

5. 「正しさ」を求めて

コミュニケーションにおける言語の「正しさ」は、対話者が相互に収束させた即事理論によって決定されるという理論的説明を私たちは確認した。しかしその収束がどのようにして行われるかの指針がなければ、即事理論という新たに明らかになった第二言語教育の側面も画餅に終わるだろう。だが1986年論文におけるデイヴィドソンは即事理論の形成に関して読者をむし

ろ突き放した言い方をしている。彼は即事理論の形成は、それまでの枠組みでは説明不可能なデータを説明する科学理論の形成と同じであるとし、新しい科学理論の作り方を標準化 (regularize) したり教授 (teach) したりすることが困難であると同様、即事理論の形成の仕方を標準化したり教授したりすることは困難であるとしている。

だが、この即事理論の形成という問題意識は、即事理論という用語が登場する以前からデイヴィドソン哲学において中心的な役割を果たしていた。すなわち、解釈者が話されている言語を (ほとんど) 知らない状況での解釈—デイヴィドソンの用語でいうところの「根元的解釈」(radical interpretation)—である。根元的解釈において解釈者は、その発話状況での世界のあり方を経験主義的な (empirical) 制約とした上で、発話を解釈せねばならないという課題を担っている。ここにおいて解釈者は発話の意味もわからなければ、発話の背後にある発話者の信念についても情報をもっていないといえる。解釈者に明らかに与えられているのは、(認識された) 発話と、発話時の世界のあり方だけであり、これら二つともに発話の意味と発話者の信念を同定するほどに詳細なものではありえない (場面が刺激として与えられれば、意味をもった発話が反応として決められるとするのは、あまりに単純な行動主義の発想である)。解釈者はこのような状況の中で、根元的に・徹底的に解釈をしなければならないというのがデイヴィドソンの問題設定である。

そのような根元的解釈が、偶然の幸運による確率を超えて成功するとすればそれはなんらかの指針に導かれたものでなくてはならない。デイヴィドソンによるならばその指針は寛大の原則 (principle of charity) である。寛大の原則とは、発話の解釈の際は、まともな範囲でできる限り、その発話者が正しいことを述べているように解釈をすることというものを貫くこと (Davidson 1984 : 137)、言い替えるなら、話者が常軌を逸したことを述べているように思えるときにでも、その話者に最大限の理性と真理を見出そうとすること (ibid 153) である。

この原則は極めて当たり前のことを述べているように聞こえるかもしれないし、また極めて偏ったことを述べているように聞こえるかもしれない。極めて当たり前というのは、話者が常に (あるいはたいていの場合) 虚偽を告げたり錯誤を告げたりすることは非現実的であるからである。これは確かに、話者が真理を語っていると全くいえないような状況では、話者が合理的であるとか、そもそも言語を使っているとはみなせないという規範的な意味で正しい。ただ第二言語コミュニ

ケーションの一部のように、いわゆる「異文化」が (おそらくは過剰に) 意識される場面では、時に話者をナンセンスしか語らない存在と決めてかかる偏見がみられる。そのような点から考えるとこの寛大の原則は「極めて当たり前」として軽視されるべきではない。話者が真理を語っているに違いないと決めてかかるやり方は十分に実践的な指針である。

極めて偏ったことを述べているように聞こえるというのは、「真理」(truth) という性質は、誠実な主張にはあてはまっても、疑問や命令や皮肉や嘘などにはあてはまらないように思えるからである。しかしこれはデイヴィドソンの真理条件の意味論にやや批判的な Strawson (1970) も認めるように、真理条件あるいはそれから派生する条件 (あることが真であるかを尋ねること、ある事態が真になるように命ずること、真とは正反対であることが明らかな主張をすること、真ではないことをひそかに信じさせること、等などに関する条件) はほとんど全ての文の核にあることといえる。デイヴィドソンの表現を借りるなら、真理は、あらゆる文にあてはまったりあてはまらなかったりする唯一の特性である (Davidson 1984 : 134)。この意味で、寛大の原則は解釈一般に関する原則であるといえる。

従来、第二言語教育の誤用分析 (error analysis) において、誤用・間違いは言語共同体の言語慣習との不一致の点からだけでなく、理解の不成立という点からも考察されるべきだとされてきた (Burt and Kiparsky 1972)。その文脈で理解を困難にする誤用・間違いとしてグローバル・エラー (global error) という用語が確立した。しかし、それはしばしば語順の誤りに関するものとして扱われてきた (Richards et al. 1992)。だがグローバル・エラーとは、正確に言うなら即事理論の収束に関わることであり、必ずしも語順の誤りに関するものではない (実際、定冠詞と不定冠詞の違いも場合によってはグローバル・エラーになりうる)。即事理論の収束への指針が寛大の原則である以上、グローバル・エラーとは寛大の原則の放棄と考えるべきではなからうか。すなわち、グローバル・エラーとは、解釈者にとっては、話者が可能な限り真を述べているはずだという作業仮説を放棄すること、話者にとっては、自らの発話が世界との関連において可能なかぎり真であろうとすることを放棄すること (つまりは解釈者が寛大の原則を放棄せざるを得ないようにすること)、というのが本論文の主張である。

第二言語教育はこれまで「言語」の教育であることを強調するあまり、話者の発話とは、教師の指示によって適宜変化させられるものにとらえられてきたきらいがある。Sの指摘およびデイヴィドソンの論は、コミュニ

ニケーションが言語慣習への合致ではなく理解をめざすこと、また理解をめざすために真理という概念を重視することを示唆しているといえる。理解と真理の強調というこの理論的な主張は、第二言語教育方法論の観点からするなら、pattern practice から、communicative language teaching、さらには内容重視(content-based) への移行、社会言語学の観点からするなら、民族言語としての英語から国際言語あるいは地球言語としての英語への移行にも重なる現実的な主張でもある。コミュニケーションのための第二言語教育、特に国際言語としての英語教育は、狭義の「言語」を超え、世界における「理解」と「真理」を目指す教育となる。

【注】

- 1) アウトロウ・スプルーール (2001)。なお賛助会員としてこの発表を可能にしてくれたつばめ交通株式会社に感謝したい。
- 2) 実際、学会発表 (2001年8月8日) の際のプロアからの質問にはそのようなニュアンスが窺われた。
- 3) 例えば小林 (2001) などを参照されたい。
- 4) 「理論」という用語が使われているのは、解釈者の能力には再帰的説明が必要とされていることを含意するための用語である。
- 5) もちろん常にコミュニケーションは成立するわけではない。デイヴィドソンの議論はコミュニケーションの成立を公理として要請しているという批判はLudwig (1999) にみられるが、しかしその批判とて現象的にしばしばコミュニケーションが成立している事実は否定できない。
- 6) これを田中・深谷 (1998: 246-7) は「対話に臨む際には“a fully-functioning person”であれ、そして同時に学習者としては“on becoming a person”という大きな流れの中にいる」と表現している。

【参考文献】

- ①Bachman, L. F. 1990. *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- ②Bachman, L. F. and Palmer, A. S. 1996. *Language testing in practice*. Oxford: Oxford University Press.
- ③Burt, M. and Kiparsky, C. 1972. *The Gooficon*. MA: Newbury House.
- ④Canale, M. and Swain, M. 1980. “Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing.” *Applied Linguistics*, 1 (1): 1-47.
- ⑤Davidson, D. 1984. *Inquiries into truth and interpretation* Oxford: Oxford University Press. (野本和幸, 植木哲也, 金子洋之, 高橋要訳. 1991. 『真理と解釈』東京: 勁草書房).
- ⑥Davidson, D. 1986. A nice derangement of epitaphs In E. LePore (ed.) *Truth and interpretation* Oxford: Blackwell.
- ⑦Dummett, M. 1986. A nice derangement of epitaphs: some comments on Davidson and Hacking. In E. LePore (ed.) *Truth and interpretation* Oxford: Blackwell.
- ⑧Ludwig, K. 1999. Meaning, truth and interpretation. In Zeglen, U. M. (ed.) *Donald Davidson: truth, meaning and knowledge*. London: Routledge.
- ⑨Richards, J. C., Platt, J. and Platt, H. 1992. *Longman dictionary of language teaching and applied linguistics*. Essex: Longman.
- ⑩Strawson, P. F. 1970. Meaning and Truth. Reprinted in A. P. Martinich (ed.) *The Philosophy of Language (Fourth Edition)*. Oxford: Oxford University Press.
- ⑪アウトロウ・スプルーール, スティーブン (2001) 「Book English と English for conversation の違いについて」『第27回全国英語教育学会広島研究大会発表要綱』pp.199-200.
- ⑫小林カツ代 (2001) 『アバウト英語で世界まるかじり』集英社文庫.
- ⑬田中茂範・深谷昌弘 (1998) 『意味づけ論の展開』紀伊国屋書店.
- ⑭津田幸男 (1990) 『英語支配の構造』第三書館.